

「
ポ
リ
フ
ォ
ニ
」

○ 梗概

産婦人科の待合室で、松島雪音（31）は息子を連れた遠山瑛子（30）に声を掛けられる。二人は高校の同級生で、同じ漫研のメンバーだった。

再開を喜ぶ二人。しかし、雪音は不妊治療中、瑛子は子沢山でさらに妊娠が判明したところだった。

雪音はイラストレーターとして仕事をしており、身なりもよいが、瑛子は働いたことがなく子育てに忙殺されており、身なりも悪く、雪音との差を気にしていた。

雪音の夫、透は不妊治療に非協力的だ。男性不妊の検査を嫌がっているのだ。そのことに不満を持つ雪音。

瑛子の夫は、子沢山を望んでいた。妊娠したことを隠していた瑛子は、夫に妊娠がバレてしまい、もう産みたくなってしまう。雪音と再会し、絵を学び自分の仕事を持つ雪音が羨ましくなったのだ。高校時代は自分の

ほうが絵がうまかったのに、進学のを妊娠に奪われたように感じていたのだ。

雪音は、不妊治療のために、まずは子宮筋腫の治療をすることになる。説明を聞きに行った病院で、夫の検査もすることになるが、夫は走って逃亡してしまう。その消極的な姿勢に怒りをぶつけ、雪音はそのまま立ち去ってしまう。

瑛子は子供が事故で入院してしまい憔悴する。夫に怒りをぶつけてしまい、家を出てしまう。

深夜のファミレスで会う雪音と瑛子。二人はカラオケで夜を明かし、早朝の堤防に降り立つ。朝日の登る堤防で、川に向かって不満を叫ぶ二人。お互いの抱える不満に気づくのだった。

地域のカルチャーセンターでのイラスト講座の講師の依頼を受けた雪音。そこには、講座を受けにくる、お腹が大きくなった瑛子の姿があったのだった。

○ 登場人物

松島雪音（31）イラストレーター

遠山瑛子（30）主婦

松島透（34）雪音の夫

遠山渉（38）瑛子の夫

遠山蓮（3）瑛子の次男

遠山奏多（6）瑛子の長男

遠山花梨（7）瑛子の次女

遠山夢野（10）瑛子の長女

向井良美（55）瑛子の母

吉岡敬之（45）松島の上司

女医

看護師

医師

○米田レディースクリニック・外観

周辺は田んぼ。

駐車場の大きな、産婦人科の病院。

産婦人科、婦人科、不妊治療などと書かれた看板。

○同・待合

妊婦や子連れ。女性がたくさんいる。

妊婦や子供に目が行き、ため息をつく

松島雪音（31）。

シートに座り、スマホを見る。

遠山瑛子（30）が遠山蓮（3）の手

を引いて雪音の前に立つ。

雪音の目線に瑛子と蓮の足元が入る。

瑛子「ユッキー？ 大貫雪音じゃない？」

雪音がスマホから顔を上げると瑛子と

蓮がいる。

雪音「え？ 瑛子？ 向井瑛子？」

瑛子「そうだよー、久しぶり！ 今は向井じやなくて遠山だよ」

雪音「えー、久しぶりだね！ 高校卒業以来

かな。やだ、うれしい。私は今は松島だよ」

雪音をじっと見つめている蓮。

雪音「あれ、瑛子の子供？」

瑛子「そうだよー、蓮です、3歳です」

雪音「えー、こんにちはー」

照れる蓮。

○公園

子供達が走り回って遊んでいる。

しゃがんでアリを見ている蓮。

ベンチに座って蓮を見ながら話してい

る雪音と瑛子。

雪音「高校の時漫研でさあ、同人誌作ったよね」

瑛子「懐かしい！ 楽しかったよね。ユツキーは二次創作だったよね。みんな好き勝手描いてた」

雪音「瑛子はオリジナルのマンガ描いてた。いつも恋愛もので、しかもうまかったよね」

瑛子「絵はね。好きだったから。内容的には恋愛ものが好きだったの。素敵な恋愛したいっていつも思ってた、その妄想を漫画に投下してたんだよね」

雪音「瑛子はあるまま美大かデザインの専門行くのかと思ってた。あれ……、瑛子って、卒業後どうしたんだっけ」

瑛子「……うん」

蓮「ママー！」

蓮が瑛子のところに走ってくるが、またどこかに行ってしまう。

雪音「蓮くん、活発だね」

瑛子「そうなんだよね」

雪音「コンクールはいつも瑛子が金賞だった。いつも私は全く歯が立たなくて、悔しいし羨ましいし。私なんかよりずっと絵がうまかったよね」

硬い表情の雪音。

瑛子「……でも、ユッキーは今やプロのイラストレーターでしょ？　すごいなあ。もう

雪音先生ってかんじだよね」

雪音「私はさあ、たまたま、東京の美大に行
って、それで、いろいろラッキーだったの」

瑛子、雪音の身なりを見る。高級ダウ
ンコートに、ブランドバッグ。高級ブ
ーツを履いている。

瑛子、自分を見て顔をしかめる。毛玉
だらけのコート、適当な布袋バック、
履きつぶした靴。

雪音「美大出て、就職したデザイン会社で
色々やってるうちに、自分で描いたイラス
トが使われたりとかして。絵一本でやって
いけるようになったのは、最近」

瑛子「……いいね。……クリニックには定期
検診かなんか？ あそこの先生、いい人だ
よ。受付の女の人は怖いけど」

表情が曇る雪音。

瑛子「あそこ、お産もやってるし。それ以外
だと、県立医大だね。お産やってるの」

雪音「県立医大だと、車で1時間はかかるも

んね」

瑛子「米田レディクリは、今の時期は市の定期検診クーポンの人が多いんじゃないかな」

雪音「あ、いや、違うの。……私、東京の病院で不妊治療していて、でも夫の仕事の関係で、こっちに転勤になったから、最近こっちに戻ってきて。それで、こっちの病院探さなきゃって思ってた」

瑛子「不妊治療……、そうなんだ」

雪音「まさか私が、不妊治療なんてするとは思ってなくて。結婚すれば、望んだように子供ができるんだと思ってた」

走り回る子供たち、アリを見ている蓮。

固い表情の瑛子。

雪音「自分が子供を持てることを当たり前の未来だと、どこかで思ってたんだよね」

ベビーカーを押す女性を見ている雪音。

瑛子、雪音のネックレスを見て、手を握りしめる。

雪音「そんなことないのにね。健康には自信

があつたし、私運がいいから、なんとか
るだろうって、変な自信があつたの」

瑛子「ユッキー」

雪音「でも、全然ダメで。生理が来るたびに
落ち込んで。うまくいなくて」

雪音の指には高そうな指輪。

それを見ながら荒れた手をさする瑛子。

蓮が、走って瑛子の元へ来る。

雪音「子供、いいなあ。かわいい」

蓮、雪音に人見知りする。

瑛子「……私、この子が四人目なの」

雪音「ええ？ 子供四人もいるの？ すごい

ね！ すごいよ」

雪音、悲しげな表情。

雪音「いいなあ……」

雪音をじっと見る瑛子。

瑛子「……それと、今日五人目の妊娠もわか
ったの」

お腹をさする瑛子。

雪音「え……。おめでとう。すごい……」

瑛子「東京だと、子供一人とかが多いと思うけど、こっちは結構兄弟多い人もいて」

公園内を走り回る子供たち。

雪音「……うん、こっちはそうだね」

瑛子「うちも旦那が兄弟多いから、子供沢山ほしって」

雪音「……そうなんだ」

瑛子「毎日大変だけど、かわいいよ！ ユツ

キーも、早く子供できるといいね」

雪音「……うん、ありがとう」

力なく笑う雪音、瑛子は自己嫌悪の表情。
情。

○松島家・外観（夜）

中古の戸建て。

小型の国産車が停まっている。

○松島家・リビング（夜）

電気がついていない暗闇の中、雪音はソファに座っている。

玄関の開く物音。

暗闇の中雪音は反応しない。

松島「ただいまー」

松島がリビングに入り、電気をつける。

松島「うわ！ いたの？ 電気くらいつけな

よー」

雪音に近づく松島。

松島を見る雪音。

松島「雪音？」

雪音「今日、米田レディースクリニックに行
ってきたの」

カバンを置いて、コートを脱ぎながら
応対する松島。

松島「ああ、あの近所の産婦人科ね。この辺
の病院で、駐車場広いよね」

雪音「そしたらね、病院で、高校時代の友達
に偶然会ったの」

松島「やっぱり地元だね。転勤で帰ってきた
なんて、珍しいんじゃない？ 楽しかった？」

固い表情の雪音。

雪音「……その子、子供四人いて」

話しながら泣き出す雪音。

松島「よ、四人？」

雪音「五人目妊娠したって」

泣き出す雪音。

松島「雪音……」

雪音「どうしてうちには来ないのかな。私また生理きちやったよ。どうして私は妊娠しないの。ずっと待ってるのに」

松島「雪音」

松島、泣く雪音を抱き寄せる。

雪音「ねえ、透も検査受けてよ。男性不妊の検査。検査って私だけ受けても、意味ないのわかってるよね」

松島「俺は……」

逡巡する松島。

松島「俺はいいよ」

松島、雪音から離れる。

雪音「え？」

松島「俺はいいって。雪音、昼夜逆転して仕事してたから、体内時計狂っちゃったんじゃないの？」

雪音「はあ？今はちゃんとしてるよ。絵を描くのに関係ないから、前は、つい、夜中にやってたけど」

松島「それよりさあ、車買換えようよ。このあたりとか、田舎は車がアイデンティティなんでしょ？外車のいいやつが欲しいなあ」

立ち去る松島。

惘然とした表情の雪音。

○コーポ山田・外観

ボロボロのアパート。共有部には、薄汚れた子供のおもちゃなどが散乱している。

101号室に「遠山」の汚れた表札。

○同・玄関

扉が開いて、瑛子と蓮が入ってくる。
薄汚れた靴が大量に出ている玄関。室内も雑然としており、洗濯物の山ができている。床も見えないくらい物が散乱している。

瑛子「（ため息）」

玄関にかけられた、安っぽい鏡に映る自分を見る瑛子。

扉についている郵便受けを見ると、請求書と書かれた封書が数枚。

瑛子「また請求書か……、余裕ないよ」

布袋から、求人情報誌を出し、見つめる。その後、同じ袋から母子手帳と紙類がはいったクリアファイルを取り出す。

それを見て不快そうな表情の瑛子。
それらを紙書類がぎゅうぎゅうに入った棚に押し込める。

再度鏡に映った自分を見る。

瑛子「ユッキー、若かったなあ」

自分の頬を触る瑛子。

お腹を触る瑛子。

瑛子「……どうしよう、どうしよう」

暗い顔の瑛子。

ドタドタと音がする。

奥の引き戸から遠山奏多（6）と遠山

花梨（7）が出てくる。

奏多「ママー、えんぴつマン描いてー」

花梨「ママ、シュリンププリンセス描いてー」

瑛子「……うん」

雑然とした室内に入っていく瑛子。

床に座って、お絵かき用紙にすらすら

と絵を書いている。

花梨「ママの絵、上手！」

瑛子「ありがとう」

壁には子供の絵に混ざって、上手い瑛

子の絵が飾ってある。

○同・リビング（夜）

時計の針は十二時をまわっている。

遠山 渉（38）が帰宅する。

遠山 「ただいまー」

奥の引き戸が開いて、瑛子が出てくる。
奥の部屋には子供たちが川の字で寝て
いる。

瑛子 「おかえりなさい。みんなもう寝ちゃっ
てるから」

冷蔵庫から麦茶を出して、遠山に渡す。

遠山 「うん」

遠山、ふと見た書類の束から、求人情
報誌を手にする。

遠山 「何これ」

瑛子 「それは」

遠山 「なに、これ」

瑛子 「……そろそろ働こうかなって」

遠山 「は？ 無理でしょ。無理無理。瑛子は
うちの店でしか働いたことないでしょ」

瑛子 「それは、高校の頃のバイトで……、そ
のあとすぐ妊娠しちゃったから」

遠山 「通用しないよ。通用しない。瑛子是要

領悪いんだから。子供もまだ小さいんだし、
瑛子家に居たらいいじゃん」

瑛子「でも、もっとお金必要じゃない？ 子供もたちもどんどん大きくなるし」

遠山「は？ 俺の稼ぎで生活できないとしたら瑛子のやりくりの問題あるんじゃないの」
瑛子「え？」

遠山「ねえ、蓮も大きくなってきたし、そろそろもう一人できないかなあ、赤ちゃん、ほしくない？ 俺の子、産んでよ」

瑛子「は？」

遠山「子育てて家にいるでいいじゃん。専業主婦やらせてもらえるなんて最高に贅沢なんだよ」

瑛子「そんな、もう子供無理だよ。金銭的にも、肉体的にも、手が足りないし、無理だよ。無理無理」

遠山「そろそろ次の子欲しいなあ」

瑛子を抱き寄せる遠山。

遠山「ね？ 子供は宝だよ。産めるなんて、

女性としての本能が満たされるんじゃないの？ もう一人作ろうよ」

お腹を押さえる瑛子。

遠山「子供の成長は喜びでしょう？ 子供はいくらいてもいいでしょう？ ねえ」

押し返す瑛子。

瑛子「……今日は、体調悪くて。もう寝るから」

子供たちが寝ている部屋に戻る瑛子。
動揺している。

○ラーメン屋・内

お昼時にぎわっている店内。

スーツ姿の松島と吉岡敬之（45）が
水を飲んでいる。

吉岡「しっかりさー、うちも奥さんトシだから、なかなか難しくてね」

松島「不妊治療中ですか？ 課長、あの、検査しました？ あれの」

眉間にしわを寄せる吉岡。

吉岡「あれか……」

松島「あれ」

吉岡「あれは……、アイデンティティクライシスだ」

松島「なんて？」

吉岡「男としての挟持が、プライドが、崩れ去った」

松島「ええ」

吉岡「あなたのは運動率が悪いとか、今回はあまりよくないとか、言われてみる、自分を否定されたような気持ちになるんだよ！

ダイレクトに！」

松島「そんなことを言われるんですか」

吉岡「当人の出来が悪いよりなぜかダメージがでかいんだよ。今日はよくないとか言われても俺の体調は問題なくて、どうしたらいいのかわからなかったりするんだ」

松島「うわー、いやだなあ」

吉岡「それに、出すのがなあ。出せって言われたって、なあ。精神的なプレッシャーで

もう、つらいのなんの」

顔色が悪くなる松島。

松島「俺、デリケートなんで、無理っす。絶対に無理。無理な自信しかない」

吉岡「無理つつたってやらないといけないだろうが。奥さんの方が大変なんだぞ不妊治療は」

吉岡、松島をバンバン叩く。

松島、顔が引きつる。

吉岡「そういやさ、松島の奥さんイラストレーターなんだって？」

松島「ああ、はい。そうです。だから在宅なんで、ここへの転勤付いてきてくれたんですよ」

吉岡「うちの嫁さん、市のコミュニティセンターで働いてるんだけど、カルチャー教室の講師探しててさ、ちょっと話できないかって」

松島「イラストスクールとかですか？聞いてみますよ」

松島、スマホをいじって雪音にメッセージを送っている。

注文していたラーメンが来る。

○米田レディースクリニック・内

診察室の札。

女医と対面して座っている雪音。

モニターを見ながら話す女医。

女医「この部分ですけどね。ちょっと筋腫が大きくなってるかなと思います」

雪音「あ、東京の病院でも、筋腫の事は言われていて」

女医「このサイズだと……位置とかもですね、妊娠をご希望されていますから、手術したほうがいいかなと」

雪音「……手術」

モニターを見る雪音。

手を握りしめる。

雪音「それって、手術の後、どのくらい妊娠を避けたらいいのでしょうか」

女医「半年から一年くらいですね」

雪音「半年……、私、早く妊娠したくて」

女医「東京で、排卵誘発してタイミングを取っていたんですね」

雪音「はい」

女医「ご主人の検査はされましたか？ 人工授精など、この先のステージについては説明を受けていますか？ もちろん当院であらためて説明いたしますが」

手を握りしめる雪音。

雪音「夫は……、夫は……」

女医「不妊の原因は、半々ですからね。当院で不妊治療されるのであれば、ご夫婦で諸々の検査から始めましょう。ただ、筋腫は手術したほうがいいかなあ」

動揺する雪音。

雪音「夫と、話してみます」

○公園

俯きながら歩いている雪音。

子供の声がする公園のそばを通る。
ふとみると、瑛子が蓮と遊んでいる。
楽しそうな二人の姿に、涙が溢れてくる雪音。

あわててハンカチで涙を拭う。

瑛子が雪音に気づく。

瑛子「ユッキー？」

雪音に手を振る。

涙を拭きながら手を振りかえし、栄子に近づく雪音。

瑛子「どうかした？」

雪音「あ、いやちょっと目にゴミが」

瑛子「そっか」

雪音「……いいなあ」

遊んでいる蓮を見る。

瑛子「えっ」

雪音「蓮君、かわいいね」

力なく笑う雪音。

瑛子、雪音の持っているブランドバック、高そうなコート、高そうな靴を見

る。

瑛子「そうかな」

雪音「そうだよ」

手を握りしめる瑛子。

一人、遊ぶ蓮。

○遠山家・台所（夜）

粗末なキッチンで、洗い物をしている

瑛子。

遠山が、母子手帳の入ったクリアファイルを持ってやってくる。

遠山「瑛子、これ何」

瑛子、暗い表情で水道を止め、遠山に向かい合う。

瑛子「子供達寝てるから、車で話そうか」

暗い表情の瑛子。

○車・内（夜）

砂利の駐車場、動いていない車の運転席に遠山、助手席に瑛子。

瑛子の表情は固い。

遠山「なんで妊娠したの言ってくれなかったの」

答えない瑛子。

遠山「それに、一緒に中絶の案内書がはいってたよ。どういこと？」

クリアファイルを出す遠山。

胎囊の写真と一緒に、中絶の案内の紙が入っている。

固い表情の瑛子。

遠山「産むでしょ？」

固い表情の瑛子。

遠山「中絶なんて、ありえないから。わかってる？ 俺の子供を殺すってことだよ」

目を見開く瑛子。

瑛子「私は？ 私のことはいいの？」

遠山「え？」

泣き出す瑛子。

瑛子「もう、限界だと言っててるの。もう無理だよ！ 出産怖いよ、辛いよ、子供が四

人もいるのに、また新生児？　また一から子育て？　もう無理だよ」

遠山「瑛子？」

瑛子「もう解放してよ！　私はあなたの子供を育てるために生きているんじゃない！　私だって、やりたいことがあったのに」

遠山「俺の子供だけど瑛子の子供でもあるだろう」

瑛子「あなたは…、高校生の私に避妊しなかったよね、その後も、避妊してくれなかった」

遠山「二人の子供が欲しいねって言ってたじゃないか」

瑛子「自分の希望を私の希望にすり替えないでよ！」

遠山「子供は一人じゃ作れないんだぞ」

瑛子「私は、妊娠して、進学を断念したんだよ！　私の未来を無視して避妊しなかったのはあなたじゃない！」

遠山「今更…」

瑛子「働きたい。家庭以外の居場所がほしい。

中断した絵の勉強もまたやりたい。誰かの

ママじゃない自分に戻りたい」

遠山「そんなの、子育て終わってからでいい

じゃないか。それに、家族以外の何がいる

って言うんだ、家庭という居場所が一番だ

ろう」

瑛子「あなたは、何もわかっていない。もう

これ以上は無理。とにかく無理だから」

車から飛び出す瑛子。

車に残される遠山。

○公園（夜）

街灯の下、ベンチに座っている瑛子。

憔悴した様子。

自転車で雪音が通りかかる。

雪音「あれ、瑛子？」

瑛子「ユッキー」

× × ×

雪音「ちゅ、中絶……、考えてるの？」

うつろな表情の瑛子。

瑛子「子供を望んでいるユッキーにこんな話しても、あれだよ。ね。恥ずかしいんだけどさあ、もう今四人の子供で手一杯で」

疲れた表情の瑛子。

その瑛子をじっと見る雪音。

雪音「いや、うん、うん、そっか」

ベンチに座っている二人。

雪音「そっか、瑛子が高校卒業した後、どうなったんだっけて、思い出せなくて」

瑛子「高校生の頃、バイト先の店長が今の夫で。……店長と付き合ってるとか、舞い上がってたんだ。他の子より、大人になった気分。恋愛に憧れてたの。私の作った漫画、見てたよね？」

雪音「ばりばり恋愛モノだったね」

瑛子「私が高校生なのに、避妊してくれなくて、妊娠して、三年の後半は学校に行けなくなっていた」

雪音「進学が決まると、学校に来なくなる子もいたから、あんまり気にしてなかったかも。そんな事情があったなんて」

暗い表情の瑛子。

瑛子「あの頃は、愛されてると思ってた。でも、今は、未来を奪われたような気がしている」

雪音「瑛子は、どうしたかったの？」

瑛子「絵を、描きたかったの。専門学校に行こうと思っていたの。でも、立て続けに妊娠して、もう、身動きが取れない」

泣き出す瑛子。

雪音「あの、あのね、気を悪くしないで聞いて欲しいんだけど、それって多産DVってやつじゃないの？」

瑛子「……え？」

雪音「多産、つまり避妊を拒否したり、立て続けに妊娠させたりして、女性の意思を無視したり、自由を奪ったりするんだけど」

動揺する瑛子。

雪音「子供を作り続けることで、妻が家から出ていきにくくしたり、経済的にしばったりして」

動揺する瑛子。

雪音「妊娠や出産のタイミングは、瑛子自身で決められたの？ それとも、その意思も無視されていた？」

立ち上がる瑛子。

瑛子「そんなじゃないよ！ そんなじゃない。子供はかわいいよ。どの子も、この子に会うために私は生まれてきたんだって思ってるもん！ そんな、私を被害者にしないで！」

見つめ合う二人。

雪音「そうだね、ごめん、なんか余計なこと言った」

瑛子「羨ましいんですよ」

雪音「え？」

瑛子「ユッキーは、私が羨ましいんですよ。不妊治療なんて無縁だし、子供は欲しいと

思ったら欲しいだけできるの私」

固い表情の雪音。

瑛子「四人も子供がいて、毎日楽しいの！

毎日子供たちと一緒に寝てるの。子供達に
できることがどんどん増えていくのが、未
来が広がっていくようで、嬉しいの！」

悲しい表情の雪音。

瑛子「ユッキーは、私のことが、羨ましいん
だよ！」

言い捨てて去っていく瑛子。

取り残される雪音。

○松島家（夜）

固い表情で玄関から入ってくる雪音。

松島「あ、おかえり。牛乳あった？」

松島を見て、涙ぐむ雪音。

松島「雪音？」

泣き出す雪音。

○同・リビング（夜）

ソファに座っている二人。

雪音の前にはホットミルク。

雪音「私、こんなに子供欲しいのに、うちには来ない。中絶を考えるような、瑛子のところに来る。なんで？　なんでなの？」

泣き出す雪音。

松島「俺さあ、俺、雪音と二人でもいいと思ってるよ。旅行したりさあ、お酒飲んだりさ、楽しく生きれると思うんだよ俺たち」

泣いている雪音。

松島「まずさあ、その、子宮筋腫の治療をしようよ」

雪音「子宮筋腫の手術をすると、半年から一年は妊娠を避けないといけないって言ったよね。それって十二回チャンスを失うんだよ！」

松島「そんな焦らなくても」

雪音「透の、その、受け身な感じなんなの！」

見つめ合う二人。

松島「それは……、それは、俺は産めないか

ら、俺には何も言う権利はないとおもってる。だって、不妊治療も、大変なのは雪音じゃん。俺は何もできない」

松島を見ている雪音。

松島「本音は子供欲しいけど、それを俺は言っ
てはいけないと思ってた。だって負担が
違いすぎるじゃん。俺と雪音と」

雪音「じゃあ、自分も検査受けてよ！」

見つめ合う二人。

雪音「私のことと思ってみたい言い方しない
でよ！ 検査に協力してくれないの自分じ
ゃん！ やさしいふりして、寄り添ったふ
りしてるだけじゃん！」

松島「それは……、ごめん。俺に原因があっ
たらと思うと、ちょっと怖くて、向き合
えなくて」

雪音「私に原因ならいいって言うの？ 不妊
で、男女どちらにも半々に原因があるんだ
よ？ そりゃそうだよね、二人で作るんだ
から。でもあなたに原因があって私一人が

悩むの、おかしいでしょ！　なんで、向き合ってくれないの！」

泣く雪音。

松島「ご、ごめん……、病院で、出すのとか、嫌で、ほら、俺デリケートだから」

雪音「私、毎回股開いて検査台に乗ってるんだよ！　なんなのその、自分は無傷で切り抜けたみたいな」

うつむく松島。

雪音「どのみち、痛い思いをするのは、全面的にわたしなんだよ」

雪音を見る松島。

松島「ごめん」

雪音の手を、握る松島。

○米田レディースクリニック・外観

○同・待合室

雪音と松島、椅子に座っている。

雪音、松島を見る。

緊張している松島。

松島の手を握る雪音。

松島、雪音を見る。

○同・診察室・内

女医の向かいに、雪音と松島が座っている。

女医、手元の紙に図を書きながら説明している。

女医「子宮筋腫の手術自体は、おへそから入
れて腹腔鏡で行いますので、一時間程度、
長くても二時間も見ていただければ終了し
ます」

松島「おへそから……痛いんですか？ それ
って」

お腹を抑える松島。

雪音「おへそから入れるの私ね」

女医「全身麻酔です」

雪音「全身麻酔……」

松島「それって、目が覚めなかったりとか」

雪音「目覚めないの私ね」

女医「様々なりスクがありますから、別途麻酔科医から説明があります」

不安げに顔を見合わせる二人。

女医「入院は五日程度ですが、経過によるといったところです」

不安げに目を合わせる雪音と松島。

女医「松島さんは、妊娠をご希望されておりますが、術後、半年から一年、これも経過によりますが、妊娠を回避する必要があります。それと、麻酔科との連携になります。が、今後の出産時に経膣ではなく帝王切開になる可能性があります」

雪音「帝王切開ですか」

松島「お腹切るの？　こわい……」

雪音の袖を握る松島。

雪音「切るの私ね」

女医「まだ決まったことではありませんが。それとご主人の検査を行いたいと思います。精子の状態を見ると、血液検査を行います。

す」

松島「あの、自分、デリケートで、ちょっと自信ないっていうか、その……」

女医「ああ、検査の時だけ、ここで採取しますが、実際に人工授精が始まりますと、指定日に朝一、ご自身で採取していただくことになります」

松島「家で、ですか？」

女医「家で、です。その後、温度を保ったまま、奥様に病院までお持ちいただいて」

雪音「温度を保ったまま？」

女医「冷えないようにです」

顔を見合わせる雪音と松島。

女医「保温容器を使ったり、タオルでくるんだり、人肌で温めながら運んだりですね」

手で顔を覆う松島。

松島「なにそれ……」

雪音「大変だ……」

女医「まずは、子宮筋腫を治療して、妊娠しやすい環境を作りましょうね」

雪音「そ、そうですね」

女医「では、ご主人は、この容器に出してください」

袋に入った容器を渡される。

ぎよっとする松島。

女医「雑菌など入らないように、体液だけ入れるようにしてください」

動揺する松島。

松島「ええ……」

雪音「透？」

松島「ああ、はい」

挙動がおかしくなる松島。

看護師「ご案内します。奥様は待合でお待ちください」

去っていく松島を、心配そうに見ている雪音。

○検査室3・内

一人入る松島。

手には、容器の入ったビニール袋。

椅子とテーブル、アルコール消毒、ティッシュなどが置いてある無機質な部屋。

挙動のおかしい松島。

汗がダラダラ出てくる。

苦しそうな表情。

机にビニール袋を置く。

天を仰ぐ。

勢いよく扉を開けて廊下を走る。

○同・待合・内

スマホを見ている雪音。

ふと見ると、廊下を猛スピードで走っ

ていく松島。

雪音「は？ え？ ちょっと！」

カバンやコートを持ってあわてて追いかける雪音。

松島はぐんぐん進んでいき、外に出

しまう。

雪音、追いかける。

雪音「透！透！」

カバンやコートでバランス崩しながら
追いかける。

人にぶつかりそうになりながら、追いかける。

○病院・中庭

ベンチに座り込む松島。

頭を抱え、動揺している様子。

息をきらし、追いつく雪音。

雪音「透？なに、どうしたの？終わった
の？」

びくつとする松島。

雪音を見れない。

松島「いや、その」

雪音「ん？」

動揺する松島。

松島「……逃げた」

雪音「んん？」

雪音を見る松島。

しばし見つめ合う二人。

松島、立ち上がって頭を下げる。

松島「ごめんなさい！」

雪音「は？ え？」

松島「どうしても、どうしても無理で。あの部屋で、その……なんかグロテスクに感じてしまっ、無理ってなっ、てしまっ、て」

天を仰ぎ、松島を見る雪音。

松島「あの容器に、雑菌が入らないように入れないといけないとか、いろんなこと、考えたらもう、無理で。難易度が高すぎるよ！」

無言になる雪音。

ベンチに座る雪音、深呼吸する。

雪音「嫌だよね」

うつむく松島、深呼吸する雪音。

雪音「嫌だよ、ね。うん、わかるよ。でも、一人じゃ作れないんだこれが。それに、誰の子でもいいわけじゃないんだこれが」

松島の手を握る雪音。

雪音「透の子がほしいんだな。私」

顔がくしゃくしゃになる松島。

松島「ごめん」

雪音を抱き寄せようとするが、手が空
を切る。

雪音を見る松島。

雪音「でもさあ、でも、協力してくれないと、
どうしようもないよ！ 私、どうしたらいい
いの！」

怒っている雪音。

無言の松島。

雪音「もう、いいよ！」

走って行ってしまう。

取り残される松島。

○遠山家・内

ぼんやりしながら、お湯を沸かす瑛子。

奥の部屋で蓮の泣き声がしてくる。

カップラーメンの蓋を5個、開けなが
ら。

瑛子「ゆめー、蓮君見てくれるー？」

子供たちの声。

瑛子「ゆめー？」

奥の部屋に見に行く瑛子。

遠山奏多（6）がキッチンにやってくる。

ケトルから音が鳴りだす。

奏多、ケトルを見る。

瑛子「（奥の部屋から声のみ）奏多、ガスコンロの火を消してー」

奏多、火を消し、子供用の台を持ってきて、シリコンミトンを装着する。

台をあがり、ケトルを持つ。

ぐらり、ゆらぐ奏多。

瑛子、大きな音を聞く。

奏多の激しい泣き声。

瑛子「奏多？」

湯気の中、奏多が泣いている。

瑛子「奏多！ あああ、どうしようどうしよう」

タオルをとり、水を出し、水をかける。

夢野「ママ、救急車！」

夢野、スマホを持ってくる。

震える手でスマホを操作する。

奏多、泣いている。

○病院・待合室

瑛子に抱き着いている蓮、夢野、花梨。

憔悴している瑛子。

医師がやってくる。

医師「お母さん、ひとまず、火傷の範囲も少なく済みましたが、今日からしばらく入院です。感染症にかからないように、経過を見ることになります」

蒼白な瑛子。

瑛子「……はい」

○病院・車寄せ（夕）

軽自動車を迎えに来る向井良美（5
5）。

良美「みんなー、今日はばあばの家に行こうか」

がやがやと話している子供たち。

良美「瑛子、これ、奏多の服。と、思われるもの。わかんないから適当に持ってきたよ」

布バックに入った荷物を渡す良美。

俯いて元気のない様子の瑛子。

瑛子「うん……、ありがとう」

心配そうな良美。

良美「あんた、大丈夫？ 顔色悪いし、なんか痩せたんじゃないの？」

瑛子「ちよっと、あんまり、ここのところ食べれてなくて」

良美「涉さんは？」

瑛子「店終わったら、来るって」

俯いて、力ない瑛子。

良美「事故はあるから。仕方ないよ。あんたも小さい頃、椅子に指挟んで縫ったでしゅう？」

反応しない瑛子。

良美「とにかく、あんたはしっかり休みなさい。これから奏多のお見舞いとかでここに通わないといけないでしょう。涉さんと相談してね」

瑛子「……うん、ごめん」

良美、瑛子の背中をバンバンと叩いて、子供たちが乗り込んでいる軽自動車に乗り込む。
軽自動車が発車し、去っていく。
それを見送っている瑛子。

○車・内（夜）

砂利の駐車場、動いていない車の中、助手席に瑛子、運転席に遠山、固い表情の二人。

瑛子「子供たちは、今日は母に預かってもらう事にしたから」

遠山「瑛子」

手が震えている瑛子。

瑛子「もう無理なの！ 限界だよ！」

遠山「瑛子」

瑛子「これ以上無理。私には、人を育てるような能力も、資格もない！」

泣き出す瑛子。

遠山「瑛子」

瑛子「私が、私が見ていなかったから、私がコンロ止めてって、近くにいた奏多に言ったから」

静かに聞く遠山。

瑛子「お昼も、作る気になれなくて、でも何か食べさせなきゃって。カップラーメンでいいじゃんて。もう、嫌になっちゃって」

取り乱す瑛子。

瑛子「だから！ もう、これ以上は無理！

無理なの！ 中絶する、もう、限界だよ！」

車から飛び出す瑛子。

遠山「瑛子！」

取り残される遠山。

走り去る瑛子。

○道（夜）

街灯の下、とぼとぼと歩く瑛子。

スマホを取り出す。

母親から、子供たちの様子の写真が送られてきている。

雪音からメッセージが来ている。

瑛子「ユッキー？」

（雪音メッセージ）なんか色々、決めちゃってごめん。みんないろんな事情あるのに。

メッセージを見て、逡巡する瑛子。

大丈夫と書かれたスタンプを送る。

すぐ既読になり、電話がかかってくる。

少し悩み、出る瑛子。

瑛子「ユッキー？」

○米田珈琲・外観（夜）

幹線道路沿い、煌々と灯りが光る。

駐車場を車が出入りしている。

○同・内（夜）

瑛子が入ってくる。

瑛子、辺りを見廻し、人を探す。

窓際に、雪音を見つける。

瑛子「ユッキー」

雪音「瑛子、ごめん。来てもらっちゃって」

瑛子「ううん、私も、家にいたくなかったから」

雪音「え」

注文をする瑛子。

瑛子「あ、デカフェのカフェラテで」

雪音「ここのデカフェ、おいしいよ」

瑛子「授乳期間含めると、だいたい八年くらい、カフェインレス生活なんだ」

雪音「それは……すごいね」

瑛子「カフェインレスを研究してるし、熟知していると言えよう」

雪音「ぶっ、専門家」

笑う雪音。

瑛子「今日、家帰りたくないな」

壁の時計は23時。

雪音「わたしも」

瑛子「何があったか聞かないの？」

雪音「そっちこそ」

それぞれ飲み物を飲む。

○カラオケ・内（夜）

青春時代の歌を歌って騒いでいる瑛子と雪音。

店員がフライドポテトを持ってくる。

時計の針は3時。

ドリンクバーのドリンクを飲む。

歌い疲れて、静かになる二人。

雪音「カラオケオールなんて、この齡でやることじゃないよ」

瑛子「私、初めて。やったことなかった。うれしい」

雪音「そっか、そうだよね」

瑛子「高校の頃、漫研のみんなでカラオケきたよね。それが最後。あとはずっと子育て」

雪音「あれから、全然違う道を歩いてきたね」

瑛子「うん」

○土手（早朝）

土手を歩く雪音と瑛子。

朝日が昇っており、朝焼けがまぶしい。

瑛子「寒いー」

雪音「寒いね。でも、この辺でこうだったな

あ」

瑛子「東京はあったかかった？」

雪音「ここよりはね。でも、こんな朝焼け、

東京では見られない」

川に沿って土手がある。

川の向こうから、朝日が昇っている。

刈り取られた田んぼが広がる。

土は霜柱が生えてキラキラ光っている。

瑛子「スーパー堤防だからね。これ」

雪音「スーパー堤防？　なにそれ、なんかす

ごい」

大きく息を吸い、叫ぶ瑛子。

瑛子「もう子育てやだよー！」

瑛子、スッキリした顔。

雪音「え、私も。透ー！不妊検査しろよー！」

瑛子「え？なにそれ」

雪音「怖いとか言ってるんじゃないよー！」

瑛子「あははは、もっと稼いでこいよー！」

雪音「車買うより不妊治療だよー！」

瑛子「ワンオペ育児つらいよー！」

雪音「早く子供に会いたいよー！」

瑛子「……絵の勉強したいよー！」

瑛子を見る雪音。

瑛子「働きたいよー！家で子供の世話だけ

じゃなくて、私も働きたい」

雪音「瑛子……」

二人見つめ合う。

二人の笑い声がひびく。

朝日が昇っていき、二人は影になる。

○米田レディースクリニック・待合

両手で顔を覆っている松島。

雪音その様子を見ている。

松島「恥ずかしい。死にたい」

雪音「恥ずかしさじゃ死なないよ」

松島「こういうのホント無理。俺みたいなタ
イプはこういうのがきつい」

雪音「望む未来のためですよ」

松島、指の間から雪音を見る。

松島「あのカルチャーセンターのやつ、どう
なったの」

雪音「あれ？ 話聞いてきたよ。やってみよ
うかな。週一の、イラスト講座」

指の隙間から雪音を見る松島。

松島「そっか」

雪音「学びたいとか、働きたいとか、あるん
だなって思ってさ。大人になってもさ」

松島「ふーん」

雪音「美大行って、夢中で学んで、必死で働
いて、それで今不妊治療って感じなんだけ
ど、隣の芝は青く見えるっていうか」

松島「誰かを羨ましく思ったの？」

雪音「それもあるし、私も羨ましくみられる面を持ってたんだなって。自分じゃ全く、わからなかったんだけどね」

松島「ふーん」

○車・内

砂利の駐車場。動いていない車の中。

瑛子が助手席、遠山が運転席。

瑛子、お腹を触っている。

瑛子「とにかく、この子が最後」

遠山「わかった」

瑛子「それと、保育園に入りたい。あと私、働きに出るから」

遠山「でも」

瑛子「私も、涉さんに甘えていた部分もあったの。それはわかってる。でも、自分も大切にしたい。私は涉さんの付属品でもないし、子供のお世話係でもないの」

遠山「俺は、自信なくて。瑛子が、俺から離れないように……妊娠してれば、子供がい

れば離れないと思ってしまったんだ」

遠山を見据える瑛子。

瑛子「……なにそれ、ひどい」

○カルチャー教室・内

入り口に「イラスト講座」の張り紙。

ホワイトボードには、「講師 イラストレーターまつゆき先生」と書かれ、イラストが貼ってある。

生徒が着席している。

雪音「本日より、イラスト講座を担当します、イラストレーターのまつゆきです。私のイラストを見たことがある方もいらっしゃるかもしれませんが」

生徒を見回しながら話す雪音。

遅れて教室に入ってくる瑛子。お腹が大きい。

雪音、瑛子、目配せする。

雪音「どのような状況の方にも、楽しく、イラストを学んでいただければと思っています

す。よろしくお願いいたします」

拍手が巻き起こる教室内。

雪音、瑛子、笑い合う。

（終）